



ラヴァル大学との交流実績～5年間の交流と実績

京都府立大学 副学長 生命環境科学研究科 教授 田中和博

写真左) 左から、プリエール学長、ケベック州政府在日事務所エティエ代表(当時)、竹葉学長(当時) 2010年5月7日 本学にて



写真右) 2013年10月6日 モデルフォレストDAY森林保全シンポジウム 本学にて



目次

- 1 ラヴァル大学との交流実績
- 2 ラヴァル大学留学レポート
- 3 海外研究機関との共同研究
- 4 英文契約書との格闘
- 5 国際交流協定校との交流便り

京都府とカナダのケベック州は2008年4月に交流協定を締結しており、そのご縁で、京都府立大学とケベック州のラヴァル(Laval)大学が交流を始めることになった。本学は約120年の歴史を持つ中規模総合大学、かたやラヴァル大学は北アメリカで最初のフランス語による教育機関として1663年に創立され約350年の歴史を持つ大規模総合大学である。それぞれ総

合大学であるので、どの分野から交流を始めようかとなったときに選ばれたのが森林科学の分野であった。それには次のような理由があった。1992年の地球サミットの時にカナダはモデルフォレスト運動を提案した。モデルフォレスト運動とは、人と森との関係を見直し、地域ぐるみで持続的に森林を管理・保全していこうという活動であり、その実証実験地がモデルフォレストである。モデルフォレストは、世界に約40箇所あり、もちろん、ケベック州にもあるが、日本には唯一、京都にあるのみである。京都府が先頭に立って、日本で最初のモデルフォレスト運動を京都府内で展開している。そして、京都府とケベック州とはモデルフォレスト運動を通じた交流が始まっていた。そうした背景もあって、まず、森林科学の分野から交流が始まった次第である。ちなみに、森林科学の教育組織は本学では学科であるが、ラヴァル大学では学部である。

2009年3月にラヴァル大学のボールガール学部長(林産学)が来日され、9日に本学生命環境科学研究科とラヴァル大学森林・ジオマティクス学部との間で協定が締結された。2010年5月にはラヴァル大学学長らが来日され、7日に大学間協定が締結された。その日のレセプションでは、ラヴァル大学のプリエール学長からサプライズのプレゼントが発表された。それは、本学の博士前期課程修了生1名をラヴァル大学博士後期課程の大学院生として授業料免除かつ奨学生として受け入れるという大変有り難

いお話であった。この制度に応募して留学生になったのが川口敏典君である。

これまでの交流実績は次の通りである。○2009年11月ブッティリエ教授(森林政策学)、ヴィンセント教授(森林生態学)表敬訪問、○2010年3月ル・プレスト教授(森林政策学)セミナー『森林の生物多様性』、○2010年11月ル・プレスト教授、セミナー『生物多様性条約の課題』、マッキンタイア教授(森林生態学)生物多様性条約COP10記念学術交流事業シンポジウム『森が育む生物多様性』、○2011年10月川口敏典君がラヴァル大学博士後期課程へ進学、田中和博がラヴァル大学で招待講演、○2012年3月ボールガール学部長、表敬訪問、○2012年6月川口敏典君、一時帰国報告会、○2013年10月ジェリナ教授(森林政策学)モデルフォレストDAY森林保全シンポジウム、○2014年11月(予定)ジェリナ教授、国際京都学シンポジウム『都市と農村のロハスな関係』基調報告。なお、本国際交流の責任教員は森林科学科の高原光教授、池田武文教授、長島啓子助教、そして私の4名である。

ラヴァル大学とは、これまで教員間の交流として相互訪問等をしてきたが、次のステップとして、両大学の森林科学科の学生・院生を対象にして、京都府とケベック州の様々な森林・木材利用・庭園・景観(ランドスケープ)を実際に体験させる教育プログラムの開発を目指している。2015年5月にはラヴァル大学からの修学旅行生を受け入れる計画が現在進みつつあり、近い将来には本学森林科学科学生のラヴァル大学訪問とケベック州の森林視察が実現できればと考えている。

タイトル決定!

国際交流ニュースレターのタイトルは文学部3回生 指宿 生君の考えた

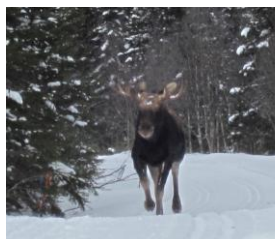
Flyin' to the Sky

と決定しました。府大生が大空高く羽ばたく様子が思い浮かびます。ご協力ありがとうございました。

ラヴァル大学留学レポート ～協定校に留学してみて～

体験談

ラヴァル大学博士課程 川口敏典
2011年生命環境科学研究科 博士前期課程修了



この留学の話を聞いたのが大学院2回生の春で、悩みもあったが、「これを逃せば2度目は無い。」と思い、研究留学に飛び込むことに決めた。研究留学の目的は学位取得のため、そして哺乳類（主にカンジキウサギ）の冬季の生態についての研究するため、今は4年目である。大学外では、ホッケーやハイキングなどをして過ごしたり、フランス語語学学校に通っている。たまにパーティーがあるので、日本人ということでお寿司を作ることもよくある。野外調査だが、冬の気温が時折零下30度まで下がるのでなかなかきつい。やはり、現地人もこの寒さは嫌みたいである。厳しい調査だが、時折遭遇するリスやヘラジカ、小鳥たちに癒されながら、楽しくこなしている。

大学は全体的に研究に専念しやすい環境だと感じた。一つは修士以上の学生は生活費をもらいながら研究しているので、経済的な不安も少ないからだ。私にとってもこの点がものすごくありがたい、アルバイトをしなくてもいいので。さらに、データ処理、英文校正などの研究サポートも受けやすい。博士課程の学生の人数が多く、同じような問題で議論する相手が多いのも一つの魅力だと思う。恵まれている環境だが、必須の口頭試験に連続2回落ちて、生活費を打ち切られ、事実上追い出された学生もいた。それでも頑張れば通る試験なので、海外の大学院は研究に専念するには絶好の場所だと思う。

現在のところ、最も困難だったことは専門知識と研究計画に関する必須試験。これが最初の一年半以内に2回あった。この試験は3人の教授による口頭試験で一時間半ほどある。目的は学生を質問で追い込んで、どこに限界（知識・考えの深さにおいて）があるかを知ることだが、ひどい言い方をすれば、これは一種の拷問だった。試験前は自分で自分を追い込む、つまりひたすら自問自答をして過ごした。試験後に試験官から意見が出されるので、自分の弱点を知り、考え方を見直す機会としては必要だったと思う。

やはり海外留学は「価値観の選択肢を増やす場所」に最適だと思う。行動様式の違い、重点が置かれる研究の違いから、別の価値観に気づくこともあった。行

動様式の違いからの例では、パーティー・飲み会の出席者が常に自分のパートナーを連れきて、紹介する。日本だとほとんど見られないから、なぜ違うのかと考えると、その行動には何か意味があるのかと考えた。人が広がるという点でこの行動の一つの意味があるように思えた。このように違いに触れることで、別の選択肢ができることは海外留学の一つの大きな意味だと思う。新しい選択肢も加えて、自分なりの価値観を見つけるのが、今の自分の課題である。

研究留学を目指す 府大生へのアドバイス

物事について深く思考すること、普段使っている言葉を自分なりに定義することが重要だと思う。これは私があらゆる場面で私がどこまで考えているかを問われていたように感じたので。例えば、「動物の保全が成功した。」という文章。ありえる質問は「保全の定義は？」「君なら成功したかしないかをどう決める？」など。自分の中で定義が不明確、考えの深さが足りないために、このような質問への答えに詰ることもあったので、この機会にじっくり考えてほしい。語学それ自体も大切ですが、それだけでは足りませんでした。この深く考える作業は口答試験、ひいては3年以上に及ぶ研究生活を乗り切る上で重要だと思う。

活動紹介

基礎研究からブラジル研究機関との共同研究へ

生命環境科学研究科 教授 小保方 潤一

私の研究グループでは、シロイヌナズナで転写開始点というのを大規模に解析したことがありました。シロイヌナズナというのは、コーヒーカップで育てられるくらいの小さな植物で、農業上は何の役にもたちませんが、分子遺伝学の実験材料としてはよく使われます。また、転写開始点というのは、染色体DNAの上で遺伝情報の読み出し反応が起きる細かな位置のことです。これは、ゲノム学や分子生物学としては大変重要な情報ですが、なにせ細かい話ですので、通常の遺伝学や生理学、ましてや農学では殆ど問題にはなりません。この細かな情報を、当時としては、世界最大級の規模で解析して公開したので、それなりに世界中の研究者に利用して頂きました。

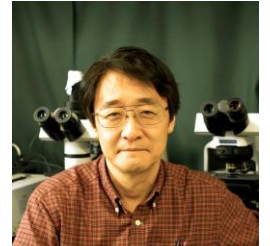
あるとき、この転写開始点について、ベルギーのセント大学の分子遺伝学者からメールが来しました。シロイヌナズナでおかしな突然変異体がとれたので、その転写開始点を網羅的に調べられないか、との相談でした。通常は、一つの遺伝子に変異が起きると、その遺伝子の機能に関わる特定の性質が変化します。ところが、その変異体では、一見、何の脈絡もない様々な性質がメチャクチャに変化していました。そこで、種子を送っていただき、転写開始点の大量解析を始めましたが、最初の頃は、その変異の生物学的意味がまるでわかりませんでした。しかし、特任助教の佐藤壮一郎君が実験データを粘り強く解析し、ついに、それらの変異を一言で説明できる新しい現象を発見しました。関係者が小躍りしたのは言うまでもありません。

これでめでたしと思いきや、今度は、ベルギーの研究相手が、大西洋と赤道を越えて、彼にとっても異国の地であるブラジルの研究所に転勤し、新しい研究室を立ち上げることになりました。この研究所は、ブラジルにある世界最大級の鉱山会社ヴァーレが新設した先端技術研究所で、近い将来大学・大学院に発展させる予定のよう

です。こうして、ブラジルの、しかも新設の民間研究所とのつきあいが始まりました。そして、研究相手であるセルゲイ先生のご尽力で、その鉱山会社から研究グラントを獲得し、この新しい現象や知見を、応用技術や育種に結びつけるための共同研究を進めることになりました。

実はここからが、本当の意味での、本学の国際共同研究の多難な始まりでした。セルゲイ先生はベルギーとブラジルの仕事の流儀の違いに面食らっているようでしたし、府大では、ブラジルの法人と研究契約書や経理書類を取り交わすという、未体験の事務仕事が発生しました。本学のような小さな組織では、これはかなりの負担になります。しかし、それができなければ、国際的に、まともな大学とはみてもられません。ある意味、本学にとって危機的な状況でしたが、幸い、企画課のスタッフの皆さんが事情を理解して奮闘して下さい、書類やメールを一つ一つ翻訳して処理するなど、なんとか契約と研究費の受領にまでこぎ着けることができました。この後も、まだ未体験の事務作業が続きますが、いずれにしても、国際共同研究がなりたつためには、それを支える事務方の存在が必須です。研究者だけでその全てに対応するのは、研究自体をあきらめない限り、まず不可能です。

文字通りの基礎研究から、このように予期せぬ研究ネットワークや応用技術の芽が生まれることがあります。本学が、小規模でも、新しい知財を生み出せる研究大学としての地位を築き発展していくためには、研究者と事務方がその理想を共有し、互いに協力しあえる雰囲気と体制をもつことが不可欠です。最後になりましたが、今回の共同研究の件でお世話になった事務局の皆さんに、この場を借りて、あらためてお礼を申し上げます。



英文契約書との格闘 ～事務局企画課より～

今回の話が持ち込まれたのは、平成25年のGW直前でした。英文の13ページの契約書と19ページの研究計画書を見たとき、正直無理かもしれないと思いましたが、担当職員の方になんとか目次だけでも訳して欲しいと説得され、できるところまではと和訳をすることになりました。

通信講座などで英和訳を学んだこともありましたが、契約書の英文は独特で、例えば”shall”という単語は、”Shall I~?”(～しましょうか?)のような学校で習った意味ではなく、この場合「～こととする」と訳し、”must”のような義務の意味を伴います。こういった言い回しを辞書で調べ、連日猛暑の夏、暑さで参ってしまそうになりながら必死で和訳を完成しました。



グリーティング・カード

和訳・産学連携担当者及び府大の顧問弁護士の確認・協議・英文修正・交渉というステップは多大な時間を要しましたが、契約締結後の年明けにはグリーティング・カードが送られてきたこともあるほど友好的な交渉でした。

契約締結後研究費の振り込みという段階になって、相手方の経理システムに円が登録されていないことが原因で、請求書へ記載すべき情報がなかなか得られないというトラブルが発生しました。入金が遅れるなら社長に一筆もらってくださいなどと言いながら関係者一同やきもきしながら期日を待ちました。日本時間の入金日になっても入金がなく、ウェブ等で調べると海外送金は複数の金融機関を経由するため送金から入金までに数日かかる場合があるとのことで、相手方が指定した予定日の翌日ようやく入金が確認されたのです。

(企画課 川崎さわか)

国際交流こぼれ話

国際交流協定校 交流便り

第1回：西安外国語大学



夏の西安外国語大学訪問

文学部
教授 上田 純一

台風11号が関西を直撃した8月10日の夜、定刻を約10時間ほど遅れ、とりあえず上海へ飛び立った。上海で乗り継ぐ必要があるのだが、予定していた乗り継ぎ便は利用できない。否応なく上海泊ということになり、結果、咸陽国際空港に着いたのは翌11日のお昼を過ぎであった。ほとんど2日がかりの旅である。直通便があれば関空から約4時間ほどの距離なのだが…。お迎えいただいた副院長母先生の、「遠いところを……」の言葉が妙に実感された。

15年ぶりの西安の街は高層ビルが林立する近代都市へ変貌していたが、新キャンパスもまた同様に壮大であった。学生総数約2万人、私の所属先である日本文化経済学院(学部)に相当だけでも学生1200人という大所帯。私は、大学院2年生約26名を対象に毎朝8時から12時まで2週間、そこで集中講義を行った。「京都の歴史と日中文化交流の諸相」というテーマである。

学生の日本語能力には微妙な差があり、初めこそ皆俯きがちであったが、2週目に入る頃から少しずつ質問も出るようになり、それにつれてクラス内の笑い声も増えてきた。彼らの中には、昨年は山梨に留学していたという人もいて、京都のお寺や名所の写真を見せると、一気に盛り上がった。休み時間の雑談では、ジブリ映画最新作や日本アニメの話題に花が咲き、「アニメ・ワンピースにおけるある定則」という貴重な(?)自説を展開してくれる人もいた。

学生の名前と顔がようやく一致し始めた頃、講義も最後となり、最終時間は「私にとっての日中文化交流」というテーマで全員に短いコメントをもらった。私が「次は京都で会いましょう」と結ぶと、皆立ち上がって拍手をしてくれた(感激!)

9月17日、帰国の前夜、学院長の孫先生、副院長呉先生、葛先生、韓先生などのご招待で送別会に出席した。席上、窓の外の雨を見ながら(西安にはめずらしく、ここ二週間ほど降り続いていた)、「雨のため西安見物も叶いませんでした」と何気なくつぶやくと、茶目っ気たっぷりの笑顔で孫学院長が、「予報では明日から晴れるそうです、もう一週間延長されては?」と仰った。今、帰国した私に学生達が「確かに毎日晴れています」とチャットをくれている。



イベント予告

第2回留学交流会を開催します!

平成26年12月1日(月)
17:45~20:00

場所：生協食堂

内容(予定)

第1部 外国人留学生の体験談

日本人留学経験者の体験談

(レーゲンスブルク大学研修参加者)

日本人留学経験者の体験談

(生協語学研修参加者)

ゲストスピーカー

(同志社大学非常勤講師

阿部美香先生)

第2部 ラリー先生による英語講義
体験

第3部 カフェタイム

留学経験者の方と自由に懇談できます。

参加希望者は国際交流委員会または生協購買部までご連絡ください。

留学生宿舎の紹介～松ヶ崎学生館～

松ヶ崎学生館は民間事業者が運営する京都工芸繊維大学指定宿舎であり、工芸繊維大学の学生及び提携大学(府立医大、府大、ノートルダム女子大学)の留学生に宿舎を提供しています。昨年入居募集を開始した新築宿舎で最新の設備を備えています。パンフレット・見学希望者は国際交流委員会(事務局企画課)までお問い合わせ下さい。



発行日 2014年10月

発行責任者 国際交流委員会委員長

〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町1-5

TEL:075-703-5905 Email:IECC@kpu.ac.jp

※国際交流委員会事務局は稲盛記念会館1F事務室に移転しました。